Special Talk

今月のゲスト

中村哲さん

TETSU NAKAMURA

「いのち」に必要なもの・必要でないもの

——アフガンの人々と生きる現場から

パキスタンとアフガニスタンで、20年以上医療活動を続けながら
現地の人々と一緒に井戸を掘り、灌漑事業を進めている中村哲医師。
政情不安、難民化する人々、たび重なる襲撃事件、今なお続く戦火、
そして史上最悪といわれる干ばつ……その中にあって中村医師はいつも
現地の人にとって今何がもっとも必要なのかを見極め、行動します。
その一貫した姿勢に、国際協力や援助のあり方を超えて、
人と人が共に生きることの原点を見る思いがします。

*2006年10月27日の講演会（アフガンいのちの基金・静岡主催）からお届けします。

雪山に支えられた農業国、アフガニスタン

ペシャワールはパキスタンの北西部、アフガニスタン（以下、アフガン）との国境沿いにある町です。ここを拠点に私たちは一九八四年から医療活動をおこなってきました。アフガン東部に三か所の診療所、うち二か所は現在戦渦を避けて一時閉鎖していますが、パキスタンの北部に二か所、合計五か所の診療施設をつくっています。並行して、ジャララバードというアフガン東部国境の町に水源対策本部を設け、飲料水と灌漑用水の確保という事業を進めています。現地の職員は約二〇〇人、作業員も含めますと、約一〇〇〇人の人々が働いています。これを財政的に支えているのが「ペシャワール会」で、すべてを募金で運営しています。

アフガンは山の国で、まんなかにヒンドゥークシ山脈があります。六〇〇〇メートル、七〇〇〇メートル

級の山々が連なり、国土のほとんどが山岳地帯です。これはアフガンという国を理解するうえで重要なことです。国といっても、私たちが思い浮かべる中央集権的な近代国家とはだいぶ違います。大きな山がいくつもあるので、谷ごとに国があるといっていいぐらい、地域地域に割拠性があります。悪く言えばバラバラ、よく言えば地方自治がしっかりしているということです。人口は約二四〇〇万人で、「民族の十字路」と呼ばれるように、わかっているだけで三〇以上の民族と言葉がある、多様性を許容する世界といえます。

二〇〇一年のアメリカによる空爆の後、村人たちに「首都カーブルの様子は知ってるか?」と聞いてみると、「この間までロシアが来ていたが、今度はアメリカが来ているらしいな」と、まるでよその国のことのように言っていました。それが一般的なアフガンの山村の姿です。

この二四〇〇万の人口があの乾燥した中央アジアでどうやって食べていけるのかというと、雪を頂いた白い山々のおかげです。冬に降り積もった雪、そして何万年もかけてできた氷河が夏に溶け出してきて、川の流域に豊かな実りを約束してくれます。人も植物も動物もそれで命をつないできたのです。まさに「金がなくても食っていけるが、雪がなければ食っていけない」というアフガンの諺(ことわざ)のとおりです。人口の約九割が農民および遊牧民、アフガンは農業国家なのです。

現地の文化、風習を認めながら医療活動をおこなう

アフガンでは、どんな小さな自治体でも中心にイスラム教のモスクがあります。モスクを中心に人々の生活はまわっています。

私たちがいまだに苦労しているのは、違った文化、違った言葉の中でいかに相手を理解するかということです。これはどこにいても当然のことですが、相手が何を訴えたいのか、何がほしいのか、何をうれしいと思うのか、それを理解するのにはそれなりの忍耐、時間が必要です。

五年前にタリバン政権が崩壊した時、「彼らは女性にブルカ(かぶりもの)を強制していた。女性差別だ」と国際社会は非難しました。そういう議論が出たことに驚きましたけれど、現地では今も昔もこれが女性の外出着で、外では決して脱ぐことがありません。この一件が象徴しているように、人は自分とは違うものを見た時に、それを単なる違いではなく、善し悪し、優劣という価値判断でとらえてしまうことが多いのです。今国際社会がやろうとしていることはまさにそれで、現地に根づいた文化、いわば人間の身についている皮膚をひっぺがすようなことをしているのだと思います。

医療の現場では、女性患者が医者に対しても男性には肌を見せないと

いう風習は不便ですけれど、女性の医療ワーカーを増やすことで対応しています。地域の文化や風習を決して排除しないようにして、その中で患者にとっての最善を尽くすというのが、私たちの現地活動の鉄則です。

ハンセン病治療から無医地区の医療活動へ

私たちの活動は、八四年五月、ペシャワールでのハンセン病治療から始まりました。アフガン戦争のまっただなかでのことです。

七九年十二月、ソ連軍の精鋭部隊八万が大挙してアフガンに侵攻しました。以後一〇年近くにわたって続いたこの戦争で死亡したアフガン人は、二〇〇万人は下らないだろうと見られています。国民の約一割が死亡し、さらに六〇〇万人が難民化するという事態になりました。

アフガン難民の約半数はパキスタン領内に避難してきていました。私たちも必然的に難民キャンプで治療のお手伝いをするようになったのですが、続けているうちに、このような地域でハンセン病治療を掲げて医療をおこなうのは、かえって罪深いことだと思うようになりました。ハンセン病を特別な病気として扱うこと自体が、それまでなかった差別を逆に生みだすことになっているのです。しかも、ハンセン病の多いところは同時に他の感染症――腸チフス、マラリヤ、結核、アメーバ赤痢なども多いところです。そのような患者が病院にやってきた時に「あなたはハンセン病でないから診察しません」というわけにはいきません。

ハンセン病患者はアフガンの山の中の貧しい村々に多く、しかも、そういった村にはほとんど医療設備がないということがだんだんわかってきました。それで私たちは方針を大転換して、アフガン山村の無医地区の診療モデルを確立することを、ハンセン病治療と共に大きな柱とすることにしたのです。

当時、パキスタンとアフガンの国境地帯は、名目上は閉鎖されていましたが、国境は二四〇〇キロにわたる山脈ですから、無数の間道があります。それで私たちは、パキスタンからアフガンへの国境を何日もかけて、山から山へ、谷から谷へと歩いて越え、診療所開設予定地の村々をめざしました。そうして現地の人々と仲よくなっていったのです。

難民たちは支援組織が撤退した後に帰ってきた

ソ連軍は一九八九年二月にアフガン撤退を完了し、当時、これを機に大量の難民が帰還して、アフガン復興が始まると予想されました。それで世界中から国連組織やNGOが押し寄せたのです。

けれどもこの時期、アフガン内部は地方地方で台頭してきた軍閥の割拠状態になっていました。内戦はさ

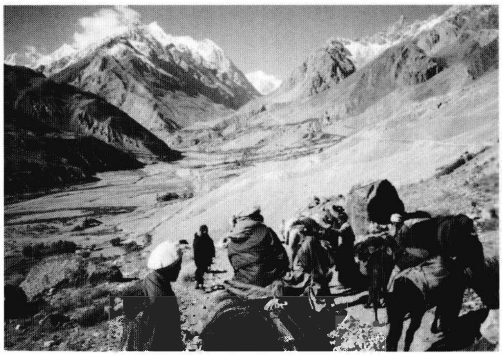
らに激しくなり、とても難民が帰るどころの騒ぎではなかったのです。

皮肉なことに、九一年になって湾岸戦争が始まると、ペシャワールも危険地帯であるということになって、支援団体の大半は引き上げてしまいました。アフガン復興プロジェクトのほとんどが、実質的にここで頓挫しています。

そして九二年四月に、ソ連が後押ししていた共産政権が倒れると、地方の軍閥がアフガン中から首都カーブルめざして集まってきました。それで内戦の舞台は地方から都市へと移っていったのです。これまで、かろうじて警察と軍隊で治安が維持されていた都市部が今度は市街戦の舞台になって、逆にそれまで戦場であった農村に平和が戻ってきた。

これでやっと村に帰れると、爆発的な難民帰還が始まったのが九二年五月です。当時パキスタンにいたアフガン難民二七〇万のうち二〇〇万人が、外国の手など借りずにぞくぞくと帰ってきました。このようないきさつは国際社会にはほとんど知られていません。

私たちはこの難民帰還に合わせるように、次々と診療所をつくっていったのです。



医療器具を積んで山岳地帯の無医村をめぐる移動診療

干ばつに見舞われた村で井戸を掘る

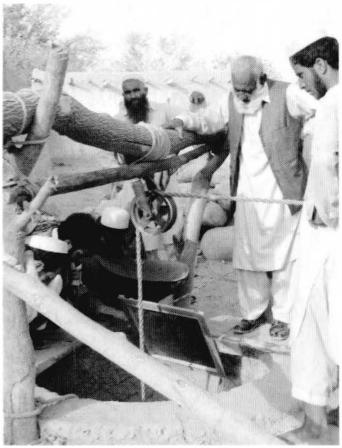
ところが、難民たちも帰郷して、さあこれから本格的に復興が始まるという時に、アフガンを襲ったのが世紀の大干ばつです。二〇〇〇年六月にWHOが発表した警告は、本当に鬼気迫るものでした。この干ばつは人類がかつて経験したことのない規模のものであるとして、中でももっとも激烈な被害を受けているアフガンでは、人口の半分以上、約一二〇〇万人が被災して、六〇〇万人が飢餓線上にあり、さらに一〇〇万人が餓死線上にある、というのです。

けれども、繰り返し発せられたこの警告に応じた国際団体はありませんでした。九六年以来実権を握っていたタリバン政権は、国際社会に対して支援を必死で呼びかけましたが、引き上げていく団体のほうが多くて、戻ってくる団体はほとんどなかったということを覚えています。

この干ばつは現在もなお続いています。数か月前まで豊かな水田地帯だった所が沙漠状態になり、生活できなくなった村人が去り、村そのも

のが消えてしまう、そういうことが実際に目の前で起きていました。

診療所には、若いお母さんたちが幼い子どもを胸にしっかり抱いて、時には何日もかけて歩いてやってきます。途中で息を引き取る人のほうが多かったと思います。しかし、幸い診療所にたどりついても、外来で待っている間に子どもの命が尽きてお母さんの腕の中で冷たくなっていく、という光景が日常的に見られました。水がないと人間は生きられない。がまんできない子どもたちは台所から流れてくるような生活排水、汚水を口にして、下痢症、赤痢にかかる。しかも食べものがなくて慢性の栄養失調で体が弱っているので、簡単な下痢症で次々と子どもたちが亡くなっていくのです。WHOが、一〇〇万人が餓死寸前であると言ったのは、決して誇張された数字ではありませんでした。


井戸掘りの様子

この干ばつをきっかけに、私たちの水源確保事業が始まったのです。

まず、残った村人たちを集めて、すでにあった井戸をさらに深くする、あるいは新たに井戸を掘るという作業に着手しました。「病気はあとからでも治せるから、とにかく生きておりなさい」という状態でした。

この活動は現在も続けられていて、これまでに約一五〇〇本の井戸を水源として確保しました。それによって数十か村、三〇万名以上の村人がとりあえず村を離れずに済むことになったのです。

さらに、飲み水の確保だけではなく、農業用水を確保するために、灌漑用の大きな井戸を掘ると共に、「カレーズ」という現地の伝統的な地下用水路の再生に着手しました。

診療所周辺もほとんど干上がって木も立ち枯れた状態でしたが、ここに八〇本の井戸を掘り、カレーズを修復して水を流したところ、すっかり回復して次の年には青々とした小麦畑になりました。それで、村を出ていった人たちも戻りはじめ、約一〇〇〇家族、人口にして一万人ぐらいが帰ってきたのです。

今では、手がけたカレーズのうち三八か所で復旧に成功しています。

やってきたのは国際支援ではなく国連制裁

私たちは干ばつがひどくなった当初、こんな悲惨な状態が世界中に知れわたれば、そのうち国際支援団体が大挙してやってくるだろうから、それまで力を尽くそうと思っていま

した。ところが、やってきたのは国際支援ではなく、国連制裁でした。

二〇〇一年一月に、国連はアフガンをテロリスト支援国家とみなして経済制裁を実行したのです。初めの頃には食べものまで制裁の対象になっていました。一〇〇万人が餓死寸前という時に食べものを取り上げようとしたことで、アフガンの人々の外国不信は決定的になりました。

その年の九月十一日にニューヨークの同時多発テロ事件が起こり、その翌日からもう国際社会では「アフガン制裁」が申し合わせたようにいわれだしました。当時、カーブルは干ばつに見舞われた農村から逃れてきた人たちでひしめいていました。おそらく一割以上の人が生きて冬を越せないだろうという、そういうさなかに爆弾を落としたら大変なことになるのは、目に見えています。

そこで急遽「アフガンいのちの基金」を設立して、食糧配給を空爆下でおこないました。配給部隊に志願したのは二〇人のアフガン人とパキスタン人の職員たちでした。

当時、日本で評論家と称する人たちが、ゲームのように映像を見ながら「これはテロリストだけを狙うピンポイント攻撃だ」と評しているのをテレビで見て、とても異様に感じたのを覚えています。そんな爆弾は絶対にありえない。実際に私たちが見た空爆は無差別爆撃です。死んだのは女性、子ども、お年寄り、何の関係もない人々が殺されたのです。

そういうなかでの食糧配給でしたが、餓死寸前のカーブルの人たち約二〇万人に三か月間、無事食糧配給を続けることができました。

全長一三キロの用水路の建設

その後、タリバン政権が崩壊して、「アフガン解放」が始まりました。「極悪非道のタリバンを打ち破って、自由とデモクラシーをもたらす正義の味方、米国」「ブルカを脱いで喜ぶ女性たちの姿」といった報道が繰り返しおこなわれ、これに世界中が見事にだまされました。悪い政権が倒れて、問題は多そうだけれども、何とかうまくいくんじゃないかという印象を残したまま、アフガンは世界から忘れ去られていったのです。

しかし、実際に解放されたのはタリバン政権が禁止していた麻薬栽培ぐらいです。そして与えられたのは女性が売春する自由、空爆で夫を失った主婦が物乞いをする自由、貧乏人が餓死し、富める者がさらに豊かになる自由、これが解放の実情です。

あの頃、みんなが本当にほしかったのは明日食べるパンです。

今私たちは、アフガンの――今のところ東部農村地帯という限定付きですが――農業生産をあげることに最大の力を注いでいます。その一環として、試験農場をつくって、地元に根づく乾燥に強い作物の栽培をめざして地道な努力を重ねています。

干ばつは毎年ひどくなってきており、灌漑井戸を掘り続けていると、今度は地下水がだんだん涸れるようになってきました。結局、地表水を有効に利用するしかアフガンが生き残る道はないということで、一つは山の下流域に無数のため池をつくって雪解け水をためること、それから水量の豊富な大河川から農業用灌漑用水路を引くことを試みています。

三年半前、全長一三キロメートルの用水路の建設が始まりました。農民たち自身が働き手となって、現在一一キロのところまで出来上がっています。これが完成しますと、控えめに見ても七、八〇〇〇町歩の灌漑が確実だと思っています。

破壊的状況のその先を生きるために

私たちは今、報復攻撃が続く「危険地帯」といわれているところで働いています。けれども、私たちは一度として住民から襲撃を受けたことはありません。住民たちにとって水は何より大事で、私たちが襲われて活動がストップしたら、住民たち自身が食えなくなってしまう。彼らの望むことを一緒にやっているかぎり、私たちは安全だといえます。

部分的に完成した用水路

だから、現時点ではNGOの人たちを守るために軍隊が出動する必然性はないのです。逆に、米軍など軍隊が駐留していると、至る所で血なまぐさい事件が起こっています。

私はこれまで、単に日本人だということで命拾いしたり、仕事がうまくいったということがたびたびありました。そこには、アフガンの人々が日本という国に対して賞賛と敬意のようなものを持っていた、ということがあったと思います。広島・長崎にあれだけの痛手を受けながら、よく立ち直ったという経済復興への賞賛、そして、五十年間も軍事介入をしなかったことへの敬意――。

けれど、これはもう過去形で言わざるをえません。この数年、特に空爆以後、日本国が国を挙げてアメリカのアフガン空爆を支持し、またイラク侵攻を支持して自衛隊を派遣したことで、対日感情は急速に悪くなっていきました。日本人よ、おまえもかという失望感が広がりつつあるのを感じます。

今、憲法を変えようという動きがありますが、もし自衛隊がアフガン

Special Talk

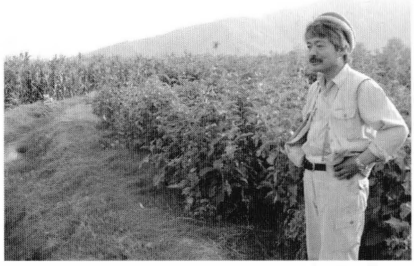
にやってきたら、おそらく私たちも同じ日本人として襲撃の対象になるでしょう。用水路建設にも支障が出る。それならば私は日本国籍を離脱して、これまでどおり私たちの方針を全力で貫き通したいと思います。

今年、アフガンは高温が続いて干ばつはさらに深刻となり、稲、トウモロコシが壊滅に近く、小麦にいたっては最悪です。戦禍も含めて、これからもっと破壊的な状況がやってくる、それはもう避けられないと思います。けれども、その先を生きるためにもこの用水路がぜひとも必要なのです。だから今、これを完成させることが最優先です。

戦禍に干ばつ、と暗い話が多いのですが、現地の村の人たちは、日本人のボランティアより明るい顔をしています。失うもののない楽天性と言えばいいでしょうか。時々日本に戻ってくると、人々の顔が暗いのが気になります。アフガンの人々と日本の人々のこの違いはどこから来るのかと考えてみると、人間というのは持てば持つほど顔が暗くなるのではないかという気がしています。日本で自殺者が年間三万人以上というのはどう考えても異常です。

アフガンと関わった最初の頃は、現地の人を〝助けてあげよう〟という気持ちがなかったわけではないのですが、今考えてみると、どうもこれによって救われたのは現地の人たちだけではなくて、私自身だったのではないか、と思えます。

今世界中を覆っている迷信があります。お金さえあれば何でもできるという迷信、武力があれば自分の身は守られるという迷信。私はアフガンでの二十二年間の実体験によって、幸いにもこれらの迷信から自由でいられます。そして命が何よりも大切だということ、そのためには何が必要で何が必要でないか、身をもって学びました。そのことを、アフガンの現実と共にみなさんにお伝えしたいと思います。



ダラエ・ヌール試験農場にて

中村哲（なかむら てつ）

ペシャワール会現地代表。PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長。1946年福岡市生まれ。九州大学医学部卒業。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の診療所勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州の州都のペシャワールに赴任。ハンセン病を中心としたアフガン難民の診療に携り現在に至る。編著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』『医は国境を越えて』『医者井戸を掘る』『辺境で診る辺境から見る』『空爆と「復興」』『丸腰のボランティア』（石風社）、『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）、『ほんとうのアフガニスタン』（光文社）など。

ペシャワール会事務局
Tel.092-731-2372　Fax.092-731-2373
http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/